

明珠

龍泉院

参禅会会報

従容録に学ぶ (四一)

第三六則 馬師不安

〔示衆〕

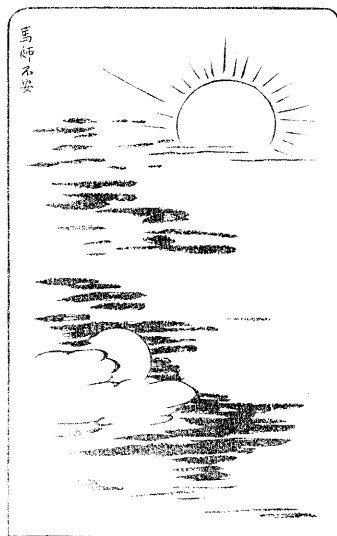
衆に示して云く、心意識を離れて参ずるも、這箇の有る有り。凡聖の路を出でて学ばば、已に太高生らん。紅炉から鉄痰が迸出さば、舌剣唇槍も口を下し難からん。鋒鉞に犯わざるを、試みに請う、挙げて看よ！

〔本則〕

挙す、馬大師、不安なり（未だ必ずしも維摩の似からず）。院主、問う、「和尚、近日、尊位は如何？」（常住の事の忙しく、問候を少得り）。大師云く、「日面仏月面仏」（是れ、転筋か霍乱なること莫きや？）

〔頌古〕

頌に云く、日面月面（観著とすれば即ち瞎れる）、星流れ電巻る（已に新羅を過ぐ）。鏡は像に対して私なし（一点も謾き難し）、珠は盤に在って自ずから転がる（拏捉れども住らず）。君、見ずや、鉈鉈の前なる百鍊た金（瓶盆のでもおのそみしたい）、刀尺の下なる一機の絹（衾被衣冠襟領袖）。



いへん長く、ふつうは「示衆」と「本則」だけのテキストが多いので

今回の一則は、馬祖道一禪師が主役です。この方が主役の則は、ほかに第三五回で学んだ「馬祖黑白」がありました。馬祖については今さら申すまでもなく、唐代を代表する大禪匠であり、この方の力によって禪が平常の生活中に根づいたといわれます。つまり、禪が坐禪修行から生活全般に開放され、画期的な展開をもたらす基となった禪匠として、馬祖の名は不朽です。ちなみに、「馬師」は敬語で「馬祖大師」のこと、「不安」は病いです。さて、今回は「本則」が短文なので、「頌古」を加えました。おさらいしておく、『従容録』の原型は「宏智頌古」百則です。宋の宏智禪師が禪門のすぐれた公案機縁一〇〇を撰び、その一々に宏智がほめうた「頌古」を付したもののから成り立っています。それを後に万松が一則ごとに細かなコメント「著語」をつけ、各則の最初には「示衆」をおき、「本則」と「頌古」の後にはそれぞれ「評唱」をつけ、こうした構成の百則でもって『従容録』ができています。ですから、元来は一則だけでもた

すが、今回はこれに宏智の「頌古」の部分までを加えたというわけ。

さて、この一則の大意「示衆」です。

「あれこれ考えず、まっしぐらに仏法を学んでも、まだフツ切れん意識があるものよ。相對をこえた向上の世界に進むとも、それは高すぎるワイ。ヒシ型トゲの焼け鉄丸には、誰も手をくだせんが、それを自在に活用するお手並みがあるぞ!」

こんなところ。馬祖の教化手段こそそれだというですね。なお、原文の「這箇の在る有り」とは、「これがフツ切れずに残っている」という禪語です。幸田露伴に「猶ほ這箇の在る有り残る暑さかな」の句があり、残暑を閉口だと詠じています。今夏のような猛暑の年の作でしょうか。とまれ、禪語を巧みに用いた洒脱さには、舌を巻く思いがします。

次に「本則」。これは、馬祖が病いで臥っていると、監院が見舞って「おかげんはいかがです?」に、大師「千年の太陽仏と一日の月仏じゃ」。ただこれだけ。わかりませんね。

まず、万松の「著語」に、馬大師の病いは維摩のそれとは違うというのは、インドで釈尊当時の維摩居士が、「衆生病むがゆえに我もまた病む」といった慈悲行の病いとは別種だ

という意味。どう違うのかは、馬祖の最期の言葉「日面仏、月面仏」の読み解きにかかっています。ところが、これがむづかしい。

元来これは『仏名経』に出てくる仏さんで、それぞれ寿命が千八百歳と一日一夜の仏さまのこと。そこで、馬祖の引いた意味は、古来「寿命はさまざま」「寿命の長さにかかわらず本来的な仏性を覚らせる語」「毎日いいお日様、いいお月様だ」など、多くの解釈がなされています。万松のコメントは、「こむらがえ



馬祖が住した洪州開元寺
(現、南昌市佑民寺)

りか熱中症か?」で、なおわかりません。そこで、宏智の「頌古」をみましょう。

「千年の太陽仏も一日の仏も、アツという間に過ぎ去り、分別の余地なし。鏡は素直に形を映し、珠は自然に盤を転がる。どうじゃ? 鍛冶師は金ばさみと鋸で何でも造り出し、仕立師は絹一反で衣服臥具意のままじゃ」。

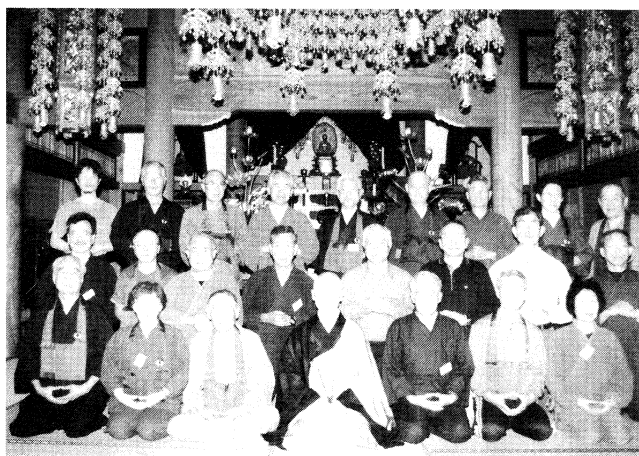
つまり、宏智は馬祖のことを、寿命の長短など問題ではなく、大切なのは生きている間に本具の仏性に目ざめること、と受けとっているのがわかります。ここには、おのれの臨終に際して監院への教示をもって、禪の眼目の何たるかを示した馬祖の面目躍如!

禅学や禅宗史学の分野で不朽の業績を遺された柳田聖山先生が逝き、やがて一年。不肖にとつては四〇年以上も学恩をいただいた恩師でした。忘れもしない本年二月一四日、花園大学教堂で行われた「偲ぶ会」で、前学長河野大通老師の弔辞は圧巻でした。老師がすでに衰弱された柳田先生を見舞われた時、思わず口から発した語は「近日、尊位は如何ん?」。すると、即座に先生は静かに「日面仏月面仏」と。いうまでもありません。ご両所にとつて、馬祖の臨終語は骨肉となっていたのです。それほど馬祖は偉大な存在でした。

一夜接心

六月九・一〇日

今年も恒例となっている一夜接心が、六月九・一〇日の両日、天徳山龍泉院で行われました。二二回目となる今回の一夜接心には、二五名の方が参加されました。例年と同じく七炷の参禅と椎名老師からのご提唱、および朝課や作務などの行事が行われました。



一夜接心参加者一同

昨年と一昨年の一夜接心の禅講では、『正法眼蔵』の中から比較的短い巻を取り上げられてご提唱いただきましたが、今年の一夜接心からは『永平初祖学道用心集』を数年にわたって、ご提唱いただくことになりました。

ご老師のご説明によりますと、『永平初祖学道用心集』は天福二年（一二三四）に道元禪師がお書きになられたものですが、この年に懷奘禪師が入門されています。

今回は「菩提心を発すべき事」など四章までのご提唱がありました。各章とも学道を志す人には、肝に銘ずる素晴らしいお言葉が述べられていました。

一夜接心も二日目の七炷目に入った時から、物凄い雷鳴がとどろき、滝のような豪雨が降り出しました。二日間の参禅の疲れや足の痛みを忘れさせるような雷鳴と、雑念を押し流す雨音の中、七炷が無事終了しました。

松井典座の心づくしの御齋をいただいた後、茶話会に移り今年の一夜接心も無事お開きとなりました。なお、ご老師からご提唱いただいた『永平初祖学道用心集』は、すべて終了した後に、明珠編集部でテープ起しをし、プリントする予定です。

初めての一夜接心

柏市 荒木二郎

坐禅を始めて二ヶ月あまり、ご老師の「自信がきますよ」とのお言葉に励まされ、「一夜接心」に参加し、皆様のおかげで何とか乗り切ることができました。心から感謝を申し上げます。おいしいお茶、すばらしい食事に元気づけられながら、休憩も適宜取れるようになっており、初心者の私にとっても無理なくこなすことができる、とても良く考えられているスケジュールだと思いました。

暑くもなく寒くもない絶好のコンディションの下、可憐な紫陽花の咲く庭に面して、小鳥の声を聞き、カラスの声を聞きながらの坐禅は、最初は順調でした。が、二日目早朝のころから、次第に脚が痛くなり、折からの雷鳴豪雨の中での最後の坐禅は、痛みに耐えるだけで精一杯になってしまいました。痛みに耐えることだけに集中していると、妄想も生まれる余裕がなく、心が平穏になった感じがしたのは、不思議な経験でした。

朝課の際の「五体投地札」や食事の際の「五観の偈」、作務の始まりを告げる「作務太鼓」等、初めて見るもの聞くものも多く、興

味深いものでした。『正法眼蔵』にトイレの作法を詳しく書いてあるところがありますが、寝ること、食べること、掃除、洗面等日常の行住坐臥の一つ一つが禅であり、今ここにあり自分の大切に毎日を生きたること、何よりも自分で体験してみることの重要性を、痛感させられた二日間でした。これからも仕事に遊びに、いろいろな新しいことにチャレンジをしていきたいと考えています。

今回の一夜接心で貴重なチャレンジの機会を提供して下さった皆様のご指導に、改めて感謝申し上げますとともに、定例の参禅会にもできるだけ参加したいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

初めての一夜接心

柏市 軍地恒四郎

一夜接心差査定を、いま改めて眺めている。オリエンテーションからの一齣一齣が甦り、六月九日一四時から翌一三時まで、あわたたしくも実に集中・充実した二・三時間だったの思いをかみしめながら・・・

参禅会新年会で今年の行事一覧表が配られた時、六月の項に確かに一夜接心とあったのだが、一泊の坐禅会ということくらいで、そ

れがどんなものなのか、本などで事前に突き詰めないまま臨んでしまったため、やつぱりと言おうか、無作法を連発してしまった。

その一つは、薬石でのこと。沢庵が廻ってきたのを食べてしまい、そのあと湯を注がれた意味も分かっていなかった。隣席の鈴木さんが沢庵を分けてくださり、食器の洗い方まで教えてくださって、本当に助けられた。あとで小畑節朗さんに質問すると、『作る心食べる心』を読むよう勧められ、実際その本を書く棚から取り出していただいたのには恐縮した。ここには「赴粥飯法」が入っており、食事の作法が細かく記されていたのだ。

また「五体投地」は折角ご老師から手順を教授されていたながら、朝課では進行が早すぎてせいぜい一拝くらいしかできなかった。

坐禅は七炷あったが、椅子坐禅では本当の坐禅になっていないと思わざるを得ない。何としてもせめて半跏趺坐が組めるよう努めていきたい。

七炷に入った直後からの激しい雷音と突然の豪雨。自分にはこの土砂降りが、世の穢れを洗い流すように見えました。そして泊りがけの接心会を共にした二〇数名の仲間たちに支えられて、未熟な自分にも仏法を修する殿

を歩いてゆける気になってくるのです。

円成や仲間とともに大夕立

接心会しめくくるかや大夕立 多謝合掌

一夜接心への初参加

我孫子市 刑部一郎

人はある年齢に達し、残りの人生を数え始めると、死を意識し始め、すると日頃余り関心のなかった宗教について、関心を持ち始めると言われております。私も例外ではなく、段々加齢と共に思想哲学について、これまで慣れ親しんできた哲学的なものから、宗教的なものに関心が移っていくのは、自然の成り行きでした。

五〇歳まで抹香臭い葬式宗教と敬遠していた仏教でしたが、六〇歳に近づくにつれ、自然に仏教に関する本を手取るようになっていました。原始仏教や大乘仏教等の本を読んでいた。次第に禅宗に惹かれて、禅関係の書物を読み出しました。禅の書物を読むうち、禅は頭で理解しても駄目で、坐禅等の実践が重要という事が分かってきました。

今年初め、我孫子図書館で仏教関係の本を閲覧していて、参禅道場として柏市の龍泉院の名を偶然見つけました。電話で確認したと

ころ、毎月第四日曜日が参禅日ということで、二月二五日の月例参禅会に初めて参加しました。

半跏趺坐で坐禅を行ったのですが、右腰臀部に故障を抱えている状態のため、翌日から痛みが再発し、坐禅断念を考え始めた時に、椎名老師の講演論文集『禅門の修行のかたちと変遷』を読み、その中に椅子坐禅の事が記述されており、三月より椅子坐禅にさせていただきます、継続して参加しております。このように、いろいろな機縁によりここまで来て、そして「一夜接心」に参加した訳です。

「一夜接心」は初心者には大変厳しいものですが、経験して初めていろいろのことが少しずつ分かってきました。これまで頭の中だけの知識であったものが、少し体で分かりかけ、思い切って参加して大変良かったと思っています。

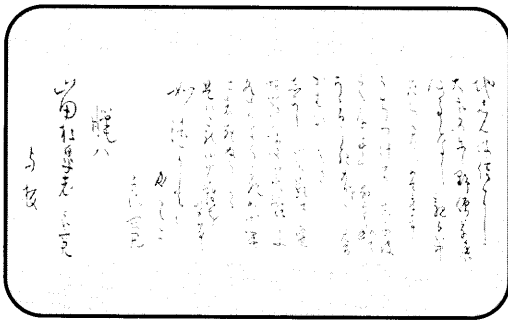
「一夜接心」を体験した後の心境は、奥深い厳しい禅という山の登り口にやっとたどり着き、一歩踏み出したという心境です。

禅の厳しさに途中で恐れをなして逃げ出さないように、椎名老師の指導のもと、腹を据えて一歩一歩進んで行きたいと思っています。

特集 災難に逢う時節

今年の七月一六日午前一〇時頃に、中越沖地震が発生しました。震源地に近い柏崎や刈羽村を中心に大きな被害がもたらされ、この地震で亡くなられた方は一名にもなりませんでした。犠牲者の方々のご冥福をお祈りし、衷心より哀悼の意を表したいと思います。

また、住宅の全半壊約一八〇〇棟にものぼり、柏崎市の曹洞宗の関係の寺院も一〇数ヶ寺が全半壊しました。



良寛和尚遺墨

新潟（越後）という土地は、昔から地震の多かったところ、あの良寛さんも、晩年に大地震に見舞われています。文政十一年（一

八二八）十一月二日に、現在の三条市を中心に起こった「三条の大震」と呼ばれる大地震です。マグニチュードは七と推定され、当時で死者一四〇〇人余り、倒壊した家屋は一〇〇〇戸と伝えられています。

この時良寛さんは、七一才になっていましたが、友人の酒造家山田杜臯（とこう）が、末の子を失い失意にくれている事を知り、かの有名な「災難に逢う時節には・・・」の短い手紙を送っています。

災難にはなるべくならば、逢いたくないものです。でも明日災難に逢うかもしれません。今回は想定外の手術を受ける破目になった清水さん、わずかに四ヶ月間に胃、眼、胸の三回も手術を受けた久光さん、ペースメーカーを埋め込む手術を受ける事になった美川さん、それに、実際に中越沖地震の被害に遭われた武田さんから、それぞれ「災難」に逢った時の感慨を述べていただきました。

この内、三人の方は、それぞれに良寛さんの「災難に逢う時節には」の手紙を引用されておられ、如何に「災難」に対処されたかが、ありのままに語られており、仏道を志すものにとって大変参考になるものと思います。

待つことの深さを知って花は咲く 草も木も人間も

我孫子市 清水秀男

三月のメッセージを送る事が出来ず、楽しみにしているのにどうしたのだ、とのご心配のメールを頂きました。申し訳なく存じます。実は二月の初めに前から予定していた、男の宿命とも言われる前立腺がんの全摘手術を、国立がんセンター東病院（柏）で行い、幸い転移はなく、予定では三週間あるいは四週間の入院で、遅くとも三月中には平常活動に近い所まで戻る事が出来ると、思っていました。しかしながら、予想もしない合併症が発生し、継続入院し点滴状態（三〇日間）のまま、三月上旬に合併症に対応する二度目の手術を実施しました。

三月一六日には一応退院しましたが、かなりの重症で、完治までには早くて一年単位の期間が必要となりました。外出もままならず、定期的に病院に行きチェックしながら、自宅療養の中で体力を付け、自然治癒を待たざるを得なくなりました。

従って四月以降の予定はすべてキャンセルという事態になりました。表現は適切でない

かも知れませんが、刑務所から出所はしたが、身体不自由者の内容の生活をせざるを得ず、自宅拘禁の状態です。

ドクターからのインフォームドコンセントでは、可能性としては少ないが、合併症の話は事前にありました。しかしまさか自分がそれに該当するとは思ってもよらず、合併症対応の二度目の手術と、一年単位の療養期間が必要だと聞いた時にはショックで、「泰然自若」とはいかず、何故自分が可能性の薄い交通事故的な合併症を併発せざるを得なかったのか、何と不幸な人間なのか、先行きの不安と共に時々襲って来る痛みの中で、愚痴と挫折感の連続でした。

良寛さんの「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候」の心境には程遠く、煩惱多き自分の弱さと修行の至らなさを痛感いたしました。

しかし、よくよく考えてみれば生死をさ迷う状態ではないし、私の苦しみは他の多くの人が味わっている、更なる多くの種々の塗炭の苦しみからすれば、たいした事はないではないか。

誰の人生にも挫折なり苦がある（今回は私の今までの人生にとって最大だが）。この苦の節を逃げないでどう乗り越えるか、自分の魂を磨き成長する為に、天が与えた試練ではないだろうかと思うようになってきています。

釈迦は人間が悟りに導くための実践徳目として、六波羅蜜を説きました。布施（与える）、持戒（自ら戒める）、忍辱（苦難に堪え忍ぶ）、精進（たゆまず努力する）、禪定（瞑想により精神を統一する）、智慧（以上の五つにより真理を見極め悟りを完成する）の六つです。その中で「お前はすべて至らないが、その中でも一番欠けている忍辱修行をしろ」との天の声ではないだろうか。あくせく、くよくよ、いらいらしないでこの一年を如何に忍べるか、まさに真価が問われているのだと思っています。

それと私の人生は退職後も含め今まで、肩をいからせ闇雲に突っ走って来た人生ではなかっただろうか。少し立ち止まり、謙虚になつて自分の心に耳を澄ませ、見つめる絶好のチャンスではないだろうか。そして人生の下り坂をもっと楽しむ余裕を持つ必要があるのではないか。それに、自分にもしもの事があつたら、必要な事を書き残しておかなくては

と、入院前に偶然購入した武石文子著のエンディングノート『大切な人に遺す自分のノート』（すばる舎）を、この機会に完成したいと思っています。

辛い時は、多くの方から頂いた励ましの言葉が心底に響き、感動・感激しました。本当に有難うございました。そして私事にわたりますが、入院中から始まり、この一年身体不自由者のな私に、准看護師的に世話をしてくれる妻の有難さに感謝しています。

最後に、日頃は観念的にしか理解していなかった言葉が、辛い入院中に、本当に身に沁みて感じた言葉が二つあります。それは相田みつを氏と、病院で毎日見ていたNHKの連続TVドラマの「芋、たこ、なんきん」の、国村隼が扮する徳永健次郎の言葉です。

・相田みつを氏 「いのちの根」

なみだをこらえて／かなしみにたえるとき／ぐちをいわずに／くるしみにたえるとき／いいわけしないで／だまって批判にたえるとき／いかりをおさえて／じつと屈辱にたえるとき／あなたの眼のいろが／ふかくなり／いのちの根が／ふかくなる

・徳永健次郎の言葉「芋、たこ、なんきん」
ええことも 悪いことも 両方あるねん

表もある 裏もある 人生それでとんとんや 以上

病は病に任し候（我が闘病の記）

流山市 久光守之

「災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難を逃るる妙法にて候」是は我が敬愛する良寛古仏の手紙の一節である。

一〇数年前、私はB型肝炎ウイルスの罹患者である事を告知されていたが、約三年前急に躍動を始め、昨年の一二月から四ヶ月間に胃、眼、胸と三回の手術を致すこととなる。

この三年間、毎日坐禅を一炷は行じさせて頂いている。そのおかげで非思量の境界に端坐し、父母未生以前の本来の面目を思量する貴重な時を、病の中に頂くことができた。

入院中ベッドの上で結跏趺坐し、自受用三昧に遊化していると、窓から見える白雲、森と林、そして牆壁瓦礫が、本来の面目を現成し、白雲の上に、樹木の裏に何物かが住し、その樹と白雲の説く法が聴こえてくる。

この自受用三昧の高貴な時間に感謝し、時は仏性なりと痛感し、非思量の境界が現成した悦びに浸りました。

病に逢って痛むのもそれはそれ。生まれる時が来たら生まれたように、死ぬ時が来たら死ぬ。病が来た時は病になる。それ病は道に任し、病は病に任せば良い。生老病死は四枚の般若なり。

この三年間の闘病生活のうち、御老師より頂いた『禪の十戒』を一〇回以上は読ませて頂いた。読み返す度に、新鮮な極意を痛感する。この天地の真相に目覚め、それぞれがそれぞれで充分。剩ることなく、欠くることなし。尽十方世界は一顆の明珠なり、との言葉に慰められる。入院中は結跏趺坐とこの『禪の十戒』を読むと、不思議な程熟睡することが出来た。

今私は結跏趺坐と『正法眼蔵』の写読、般若心経と観音経の写経を日々の日課として、行仏の威儀を行じさせていただいている。これも皆ありがたい仏縁と、大心宏雄御老師の導きによるものと深く感謝致して居ります。おかげさまでこの梅雨に入り、ようやく病にもお別れするような気配がします。

今朝も梅雨寒の空の下、毎日の朝課である江戸川沿いの道を、約一時間三〇分のウォーキング。白鷺に見守られ、今期門頭に全機現成せる、大地有情無情の成道せる道を寂かに

歩み、新しい朝を、新しい真生を、ただただ感謝して歩いている。

百尺竿頭に坐せず、更に向上しなければと思ふこの頃です。更に更に修行し、三世にわたり発心修行菩提涅槃を行じ、騰騰として天眞に任す日々でありたい。

梅雨さむや 撫づるにまかす 老神馬

(義生)

心臓ペースメーカーに生かされて

さいたま市 美川武弘

不覚にも二月中旬頃より体調を崩し、思いも寄らぬ心臓疾患(完全房室ブロックによる徐脈性不整脈)に見舞われ、心臓ペースメーカーのお世話になる羽目になりました。これも日頃の己の健康管理不行き届きと、加齢?を無視した健康過信に対し、痛烈なレッドカードを突き付けられたものと真摯に受け止め、深く反省しております。

私にとっては珍しい「息切れやら立ち眩み」といった、身体上に違和感を感じたのは、二月初旬の頃でした。自宅から歩いて僅か一〇数分の、通い慣れた浦和駅の周辺まで出掛けた際ですが、途中何回も休んでは呼吸を整えなければならぬ程、「息切れ」に悩まされま

した。はじめの頃は、殆ど気にも留めず、加齢による単なる生理的現象程度のものと思われ、括っていましたが、日を追うごとに「息切れ」は激しさを増し、ついには自宅の二階の登り降りにも、途中休まなければならぬほどとなりました。この段階で初めて、身体上の異変に不安を感じ、循環器系統の精密検査を受診する決心をいたしました。診断の結果は「徐脈性不整脈」、即ち、心臓の脈拍が非常にゆっくりしてしまう病気で、さらに、詳しく検査する必要ありとのことでした。

不整脈との付き合いは長く、現役の頃から今日に至るまでの一〇数年間、健康診断では心電図検査を受診する度に、「不整脈」「完全右脚ブロック」等々の症状が指摘されてきました。当初は多少気にもなり、精密検査を受けたり、また医師にも色々と尋ねてみましたが、「この程度の不整脈ならばあまり気にする必要はない」とのことでしたし、しかも日常生活では、何ら健康上の支障も感じられなかったこともあり、あまり気にも留めずに今日まで過ごしてきました。

再検査の日程も決まり、精密検査として心電図検査から、二四時間連続して心電図を記録するホルター心電図検査、そして、心エコ

ー(超音波)検査(超音波を心臓部に発信し、その反射波をモニター画面に映し出して心臓の形態や状態、機能などを調べる)等々、種々の検査を受けました。検査結果、下された診断名は「完全房室ブロック第三度」という聞き慣れない病名の不整脈でした。

心臓には、独自のリズムを生み出す仕組みが備わっており、心臓が規則正しく拍動(収縮・拡張)するのは、心臓の筋肉の中に、刺激伝導系と呼ばれる心房上部(洞結節)から出る、規則正しい電氣的収縮命令を、心室の筋肉に伝える組織があるからです。不整脈は、心房上部(洞結節)の電氣的収縮命令に異常が起こったり、刺激伝導系にさまざまな障害があるために、引き起こされる心臓疾患の一つです。

「房室ブロック」とは心房上部(洞結節)からの電氣的収縮命令が何らかの原因で心室に伝わりにくくなる不整脈で、ブロック(障害)の程度により第一度から第三度に分類されます。第一度は伝わり方がゆっくりのブロック、第二度は時々伝わらなくなるブロック、第三度は常に全く伝わらないブロックで、第三度ブロックでは失神発作を起こしたり、時に生命が危険になることがあります。「完全房

室ブロック第三度」と診断された私のこの徐脈性不整脈は、まさに重度の不整脈らしく、私にとってはまさに「晴天の霹靂」でした。

このような「完全房室ブロック」には、ペースメーカーの植込み手術が有効な治療手段だそうで、有無を云わず、医師の判断で即時植込み手術が決定されたのです。ペースメーカーを植込むにあたり、医師から全く馴染みのないペースメーカーについて、種々専門的な説明をうけました。

頑丈なチタンケースに密閉されたペースメーカー本体の内部は、電池と電気回路を組み合わせた発振器（ジェネレータ）が組み込まれていて、これに心臓へ電気刺激を伝えるための細長い電極（リード）を接続して、ペースメーカー全体が構成されています。電極の先を心臓にとりつけ、ペースメーカーに接続すると、発振器から一定のリズムで心臓に電気刺激が伝わり、それに応じて、心臓が拍動する仕組みになっています。

植込み手術の説明を拝聴しながら、思わず恐怖感を抱いたのは、ペースメーカー植込み手術そのものよりも、鎖骨の下に走る太い静脈に、ペースメーカー本体と心臓を結ぶリードといわれる細い導線を、心臓の中の適切な位置

（心房または心室）まで挿入することです。通常ならば一本のリードですが、私の場合は心房と心室へ二本のリードの挿入が必要とのことでした。体内に異物を入れることすら身の毛がよだつのに、況や、心の臓にブスリと二本の導線をつつ込むなんて、心臓に毛などもない恐怖そのものでした。

もし、事前に手術の同意を求められたら、「テロ特措法」延長に絶対反対をと見える某党々首同様、誰が何と云おうと私は「NO!」だったろうと思います。だが、医師の判断は正しかったようです。

医学が進歩した現在でも、効果的な治療方法が見つからない病気はまだ沢山ありますが、心臓のリズムが遅くなる病気には、このペースメーカー治療という有効な手段があり、日本では年間約四万人以上もの患者さんがこの植込み手術を受けておられ、この治療がもはや特別のものではなく、広く普及してきていることが、この数字からもよくわかるとのお話に納得させられ、いつのまにか恐怖心も薄れてきました。

ガン年齢に達している今日にあって、日頃の健康管理については私なりに細心の注意を

払ってきた心積もりでしたが、基本的な過ちを犯してきたように思われます。即ち、健康管理の対象を五臓六腑のうち、最も大切で肝心な心臓を無視して、肝臓、腎臓、脾臓、脾臓の四臓とし、やれ血圧だの、コレステロール、血糖値、中性脂肪、体重等々ばかりに気を取られ、その検査数値の高低に一喜一憂してきたようです。今回見舞われた「完全房室ブロックによる徐脈性不整脈」は、まさしくこれまで完全に無視してきた心臓のリベンジのように思われてなりません。

これからの新しい人生の歓びを謳歌できるのも「ペースメーカー」次第のようです。どうか「ペースメーカー」さん、末永く宜しくお頼み申し上げます。

災 難

柏市 武田博志

ゆらーり、ゆらーりと揺れたその地震は、とんでもない地震だった。

平成一九年七月一六日、午前一〇時一三分、新潟県柏崎を震度六強という大地震が襲った。柏崎は私のふるさと。柏崎・刈羽原発の北、五キロの地点にある椎谷は、なんと、震源地の真上である。

国道352号線をはさんで、細長い妻入りの家が並ぶ地は、過疎化が進み、今では櫛の歯が欠けたように、一軒また一軒と取り壊され、更地になっている。若者は仕事を求めてこの地を離れ、老人世帯が大半となった。

平成一五年に、老朽化した私の生家を壊し、草刈用具などを入れて置く小屋を建てた。一六年秋の中越地震では、揺れても大きな被害はなかった。土地の人は、「ここは岩盤がしっかりしているから大丈夫」と言っていたが、今回はその岩盤直下の断層が動いたのだ。

電話は翌日午後になって、ようやく繋がった。近隣の家屋の倒壊はなく、私の小屋も無事だと分かったが、この目で見るとは、どんな様子なのか心配で仕方なかった。

地震から四日後、速度規制があるものの高速道路は通じていたので、最短ルートの西山インターまで突っ走った。高速道路を下りてからの道は、路肩が崩れ縦横にひび割れが走っている。アスファルトで応急処置が施され、片側一車線がcaろうじて確保されていた。マンホールは一五センチほども隆起。橋とのつなぎ目には段差があって、車は大きく揺れた。ひしゃげて今にも倒れそうな木造の家々、土蔵は崩れ、あるいは大きく傾き、石積みや



道路にブロック塀や瓦の破片が散乱

ブロック塀は道路側に倒れていた。家の周囲には落ちた瓦が散乱し、ゆがんだ建具でガラスが飛び散り、障子は裂け切れている。山を削った箇所では、土砂崩れが起き、石や木の枝が道路上に散らかっていた。テレビで見た光景だ、と一瞬思ったが、車を降り、地に立ってみると、大変なことだとひしひしと実感する。

私の家の前まで来ると、駐車スペースのコンクリートが真一文字に裂け、大きな亀裂が

入っていた。恐る恐る、私は小屋に入った。中は積み重ねていた荷物が崩れ、棚に置いてあった物は床に散乱していた。海からの潮風をさえぎるための高いブロック塀は縦に亀裂が入っていたが、さいわい、倒壊にはいたらなかった。

稚谷の小さなコミュニティセンターには、一〇人の避難者がいると報道されていたが、夜間には片づけから帰る者や手伝いで三〇人になるといふ。車に積んできたペットボトルの水、パックご飯、ふりかけ、ウエットタオル等を渡す。電気はきていたが、水道やガスは復旧の見通しがたたない。井戸を復活させた家もあるが、飲料水は給水車に頼っていた。

避難者は、何から手をつけていいか、どうすればいいのか途方にくれていた。耳に入る話は、どこそこで配給がある、給水車がもうじき来るとか、誰そそさんが病院にいったとかいう話ばかり。ここからは自衛隊が用意した仮設の風呂場までは遠い。誰もが風呂に入りたいと言っていた。

急に襲った大災害に当惑し、なす術もない住民の姿は、私に、良寛さんのある言葉を思い出させた。

「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。

死ぬ時節には死ぬがよく候。」

修行遍歴の後、郷土に戻った良寛さんが、文政一年（一八二八）、地震で被災した与板の山田杜臯（とこう）に宛てて書いた有名な手紙だ。

被災した者にとって、この言い回しは突き放した感じがして、辛いに違いない。大勢の研究者によって、解釈の違いがたくさんあるとも聞いた。

私はこの部分だけを覚えていて、「災難は逃れようがなく、そのまま受け入れていくしかない」という諦念に重心をおいた勝手な解釈をしていた。世の中は無常だから、状況が刻々と変化し、人だっていつまでも同じではない、と世の無常を説いたのだと思っていた。柏崎から戻ると、この手紙がどのようなものか知りたくなった。新潮社とんぼの本『良寛さん』の中に、手紙の図版が載っていた。

地しんは信に大変に候。

野僧草庵ハ何事なく

親るい中 死人もなく めで度存候。

うちつけに

しなばしなずて ながらへて

かかるうきめを

見るがわびしさ

しかし災難に逢

時節には災難に逢がよく候。

死ぬ時節には死ぬがよく候。

是ハこれ災難をのがるる妙法にて候。

かしこ

なんと簡潔で有難い文面であろうか。

当時は、文書や人の口によってしか、情報もたらされない時代だった。数日後に、被災の様子が伝えられ、良寛さんは伝えたいことをすべて手紙に託した。

良寛さんは多言の人ではない。言葉は厳選され、文字にした時、思いの核心だけになった。良寛さんの人となりを知る人なれば、慣れた筆跡とあいまって、すぐに良寛さんの心を汲み取ったと思われる。

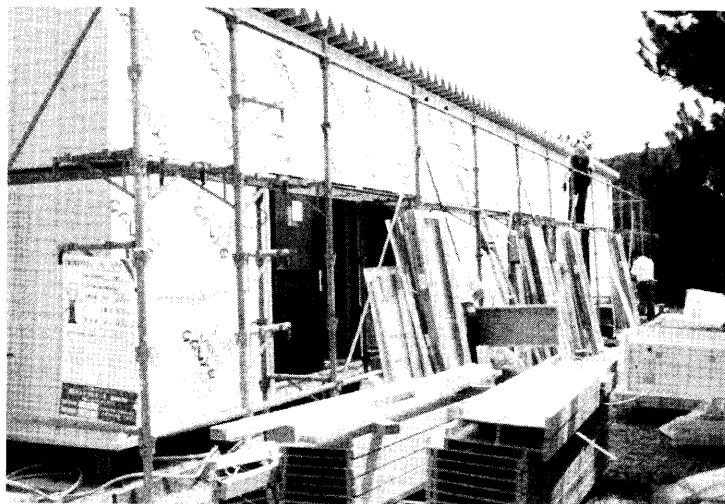
お釈迦様は、それぞれの相手に理解できる言葉で、真理を説いたといわれているが、同じように良寛さんは、杜臯さんに、厳しい言葉を使って説いたのだろう。

杜臯さんは、「こうして嘆いてはいられない。冷静になって、なんとかしていかなくては」と奮い立ったはずだ。

軽々に手紙の一部を自分勝手に解釈していたのが恥ずかしくなった。良寛さんの思いの

深さ、災難をものともしない境涯を知る機会となった。

被災してから二五日後、再び柏崎を訪ねた。水道がようやく復旧し、ガスも数日後には使えるという。仮設住宅の完成も間近い。住民の表情に、復興の意欲が見られたことが、とてもうれしかった。



急ピッチで進む仮設住宅

出会い

四街道市 大坂昌宏

私は昨年より家に一人で居る時、微かな笑みを浮かべて、私を見つめる父母を見るようになりました。また癌で三〇代にて他界した末弟、心不全で浴槽で四〇代にて他界した弟の幻影を見ることがありました。亡くなった家族は、老いて黄泉に近づきつつある私を、そろそろおいでよと招いているのでしょうか。その度に私は昏迷するのです。まだまだ生きていたいという思いはありましたので……

振り返ればさまざまな言葉にも出会いました。七〇歳でお迎えが来たら、只今お留守です。八〇歳でお迎えが来たら、まだまだ早すぎます。九〇歳でお迎えが来たら、そう急がなくても良いですよ。百歳でお迎えが来たら、此方から時期を見てお伺い致しますよと言いました。これが長寿の秘訣と聴きました。

ある時、旅先の露天風呂で知り、語り合った人からお聞きした言葉を思い起こします。それは、人として忘れてならぬものは恩義、捨ててならぬものは義理、人に与えるものは

人情、繰り返してならぬものは過失、通してならぬものは我意、笑ってならぬものは人の失敗、聞いてならぬものは人の秘密、お金で買えぬものは信用という言葉でした。

想えば、父と母との出会いがあって私が、今日の私があるのです。幼少の頃、学生時代、職場、趣味での人と言葉との出会い。あらためて見詰めれば、「人」という文字は互いに支え合うことを象徴しております。人間はお互いのために生まれた者です。まさに人との出会いがあって、自分があるのだと言うことを真摯に受け止め、大切にしなければなりません。私は仕事、趣味においても何度も挫折を味わってまいりました。また度重なる深酒で、何度も車を破損したり、留置場に留まつたり、その都度、家族や友人に多大なご心配、ご迷惑をお掛けしてまいりました。昨年の秋の参禅会での旅行でも、ご老師をはじめ、幹事の皆様方に変な迷惑をお掛けしてしまいました。ここにおいて改めて皆様方にお詫び申し上げます。

(合掌)

長い間自己嫌悪に陥り、自殺を考えたこともありましたが、そんな私を救ってくれたのは、家族の愛情と友人と先人たちの尊いお言葉でした。

「壮にして学ばば老いて衰えず、老いて学ばば死すとも朽ちず」

「一笑一若一怒一老」

「平凡なことを、平凡な気持ちで実行することが非凡なのだ」

「挫折せん人は偉い、挫折から立ち直る人はさらに偉い」

私は自信喪失しながら、父母、弟達はお迎えではなく、私の今後の人生での出会いを大切にして、さらなる素晴らしい出会いをと、励まし微笑んでいるように思うようになりました。さまざまな感動と勇気を与えてくれた先人や言葉との出会いによって、私は千里の行も一歩より始まる、と言うことを自覚して歩み続けようと決意いたしました。この自覚があつてからは、父母、弟達の幻影は消えていきました。

参禅会での出会い、俳句会での出会い、水墨会での出会い等々によって、人と言葉との出会いが如何に貴重なことかと、心底より学び知らされました。私はすでに喜寿への道を歩んでおりますが、さらなる出会いを求めて、淡々と歩み続けてまいりたいと思う今日此の頃です。

(合掌)

花祭り

四月八日（日）午後二時からお釈迦様のご生誕を祝って花祭りが龍泉院で催されました。参禅会からは七名、梅花講からは一二名の方が参加しましたが、花祭りの法要の始まる前に三〇分間練習しました。今回は配役の方がすべて新しい人に替ったため、先輩のお役の方が後輩のお役の方について指導したり、ご老師から指導を受けたりして、にわか仕込みの練習がおこなわれました。

梅花講の方のご詠歌から始まり、ご老師の釈迦生誕の法語をお聞きし、般若心経一卷をお唱えして、新しい配役での法要を無事終えることができました。これで控えのお役ができ、参禅会の活動の幅がぐっと広がったと思います。

法要の後、全員で記念写真撮影をし、お釈迦様に甘茶をかけた後、梅花講の方の手作りによる草餅をいただきながら、甘茶や甜茶を喫しました。

お茶を飲み一服した後、お釈迦様への報恩の坐禅を一炷してから解散となりました。

これからも花祭りを参禅会と梅花講の共同行事として続けていきたいと思えます。

筍掘り

今年も四月の月例参禅会の後、皆さん楽しみにしている恒例の筍掘りが行われました。参加者が三一名と何時もより大勢の方がいらつしやるので、杉浦さんがご用意していただいた筍入れの袋が、全員にいきわたるか心配しました。しかしさすが杉浦さん、その所は抜かりなく全員分ご用意していました。

暖冬のため、四月の参禅会の時には筍はもう竹になっているのではないかと、密かに懸念していましたが、四月に入り天候が不順な日が多かったためか、例年並みの筍が生えていました。

それぞれ思い思いに三〇分ほど筍を掘りあげた後、筍を全員均等になるよう分配し、袋に詰めて持ち帰りました。さらに毎年参加されていながら、今年は事情で参加できなかった古参の方にもお届けしました。

我家では一週間美味しい筍料理を楽しむことが出来ました。龍泉院さんに感謝！

施食会

八月一六日に毎年の龍泉院の行事であります施食会が行われました。この日は今年一番

の暑い日でした。史上最高気温の四〇・九度を記録した日です。

一五名の参禅会員は本堂の飾り付けと案内、車の誘導と分担し、行事はスムーズに進行しました。東京慶安寺ご住職深澤信善老師のご法話があり、さらに宗門から南こうせつ氏に、仏道に親しみを持ってもらうため、作詞・作曲を依頼した、「まごころに生きる」が紹介され、皆で合唱しました。

中越沖地震義捐金募集

八月一六日の施食会の時、椎名老師より参加者の方々に、中越沖地震被害者への義捐金ご協力の呼びかけがあり、本堂の前に募金箱が置かれました。また、八月の参禅会の時には、観音堂の玄関にも設置されました。

武田さんの原稿にも書かれているように、高齢化・過疎化が進んでいる柏崎市や刈羽村地区は、中越地震と合わせて二度に亘り震災に見舞われました。

被害地の復興や被災者の方への励ましとなる、皆様方からの暖かい義捐金は、秋のお彼岸の後、ご老師から宗門の方にお届けされました。

沼南雜記

参禅会記録（内は座談の司会者）

平成一九年

三月二五日

三二名
（添田 昌弘氏）

四月八日

花祭り

七名
於 天徳山龍泉院
幹事 小畑 節朗氏
小山 齊氏
小畑 二郎氏

四月二二日

三六名
（美川 武弘氏）

坐禅・禅講後、筍掘り

五月二七日

三七名
（武田 博志氏）

六月九・一〇日

二五名
一夜接心

於 天徳山龍泉院

幹事 小山 齊氏
小畑 二郎氏

六月二四日

三六名
（添田 昌弘氏）

七月二二日

三三名
（服部 純雄氏）

八月一六日

一二名
「龍泉院施食会」作務奉仕
法話 東京慶安寺・住職
深澤信善老師

八月二六日

二九名
（杉浦上太郎氏）

龍泉院参禅会簡介

一、日時

毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半まで
に来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、坐禅

第一炷 口宣、坐禅三〇分
経行 一〇分
第二炷 坐禅三〇分

一、講義

本版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正
法眼蔵』の提唱を聞く。九月より「都機」の巻

一、座談

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費

一、一夜接心

無料
六月上旬（本年は六月九・一〇日）一泊し、七炷
の坐禅とご提唱を聞く

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に、毎年一二月の第一あるいは
第二日曜（本年は一二月二日）釈尊成道を讃え坐
禅、成道会法要後、法話を聴取、点心を共にする

次ぎ病院に運ばれたようです。地

球は壊れかかっているのかもしれ
ません。

この『明珠』が発行される頃
は涼しくなっていることでしょう。

草の戸の残暑といふもきのふけ
ふ 高浜虚子（昌徳）

▼終戦記念日に五木寛之の『仏教
の旅・ブータンの仏教』のNHK
放映を見た。ブータンの国土は、
面積約九・八万kmで日本の九州と
ほぼ同じ、国土は殆どが三千mク
ラスの高地で人口六〇万人の小国、
国教が仏教（チベット仏教）、国語
は英語とゾンカ語、産業はほとん
どが農業、一人当たり国民所得は
日本の五〇〇百分の一と貧しい。

仏教は、輪廻転生を説き六道輪
廻を子供たちに幼いうちから諭す
など国民に深く信仰されている。

五木寛之が高僧に、日本では自
殺者が増え、子が親を殺したり、
親が子を殺す痛ましい状況が起き
ているが、何かこれを救うヒント
はないかと質す。高僧は、「愛」、

「慈悲」、「寛容」、「平等」の実践
が大切と応えた。ブータンは小国
であるが、自立できる美しい国で
あり続けてほしいと思いつつ、一
体、日本の豊かさは如何したのか
つくづく考えさせられる。

（隆道）

●発行／天徳山龍泉院 千葉県柏市泉81
●印刷／岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45
●電話 04(7191)1609
●FAX 04(7143)3131